

近世名家書畫談二編

三
冊





近世名家書畫談二編卷之三目次

- 本朝名山大雅畫ふまのやまのたいがふ真まことの幽趣ゆうしゆ故得ことくる事
- 唐帖たうてふ中日本書ちゆうにっぽん釋文しやくぶん并考へいかう
- 崎陽客さきやうかく江戸の花扇はなあふぎふ詩し故寄こよる事
- 僧月そうげつ儂じゆうが畫事がひ
- 近世江戸書畫會きんせいえど原始げんじ并落款へいらくくわん
- 盤珪ばんけい禪師ぜんじの逸事いつじ
- 小澤こざわ蘆菴あさむら翁おうの傳でん
- 僧涌蓮そうゆうれんの逸事いつじ
- 勝間かつま龍水りゆうすいの傳でん



近世名家書畫談二編 卷之三目次

○梅里山人の逸事

○白石先生の書再収奇遇の事

○熊澤伯繼藤樹先生小謁試乞ふ事 附真跡短冊

○仁齋先生櫻隱の號 附梨本翁

○大石良雄二武畫讚 并子息童名

附清人四十七士の義烈試稱譽を事

○赤穂義士閑居替名 并大高志より發句

近世名家書畫談二編卷之三

雲煙子 安西於菟編次

本朝名山大雅畫ふ真の幽趣試得る事

此邦南宗畫の開創と稱をべきハ祇南海柳里恭等あり

右二先生の目當とせるまし一つ雲の黄葉諸師の書画あり近

世彭百川大雅堂出て南宗大成を大雅ハ普く海内の絶

境に游歴し其幽趣を探るふい多る故に富士淺間白山

立山熊野等の景を造るその皆意外の奇態あり洵に小

此人出てより名山大澤真の面目を生じ多しとし筆を

その平生の墨法筆意種々小變化して一定なき凡そ是皆

古人の妙處、或は斟酌して其跡、或は踏襲せん、盡く畫家の習氣、或は脱して自ら一家、或は為す者あり、本朝逸格の始祖として愧ぢるゝと、素嗣祭先生の説まことに志あり、頼山陽先生墨竹小題して云、大雅山人墨竹、題臨溪影、更長五字、有霞樵之款、西谷生携来、索鑒曰、觀者皆以為非真也、余曰、真也、山人書畫、可謂醜恠矣、而醜中含妍、恠中藏正、世之贗手、能贗其醜與恠、而不能為其妍與正、試以此一觀、と、實小大雅の書画ハ半鑑してハ觀ることあり、ハ庸眼ハ醜恠のこみして妍正風韻を鑒者ハ何らざるバ觀るべしと云ふなり

因ふ云、大雅翁自刻の印、小前身相馬方九臯と鑄られ、多るあり、是ハ形似、或はまて神髓、或は事とまの意、或は陳簡齋の句、或は列子小出する故事、この姓名九方臯と云ふべき、或は誤りあり、或は方九臯小作りとなり、或は或は其ま、小用ひて終身改免らざる、或は其人の胸襟豪放、或は小不足ると、或人云、り

唐帖中日本書釋文并考

陳元瑞玉煙堂董其昌戲鴻堂帖中、小出せし日本書と記せる、その何人の書といふこと、或は志る人稀、或は廣澤翁も未だ考へずといひ、讀むるに、字ありといひ、予今松下見

林翁の説小付て釋女並小考考城附附て法帖法帖城好む人乃
為小小城城ひるひる也

暮春遊施無畏寺。翫半落花。絕句為韻。

鬱檀一首

落花委地亦殘枝。如有如空意始知。何似道場檀
越老年顏白髮半頭時。

三月盡日。於施無畏寺即事。絕句為體。

左拾遺一首

艷陽三月今日盡。白首拾遺感懷催。欲以危身期
後會。明春誰定見花開。扶醉走筆。不避調聲。

以上二枚。此皇子手蹟臨之也。

日本草書。如唐人學二王筆迹。薛嗣昌

晉陽張誠一嘗覽 子雍題

右詩二首並小跋語十二字まで日本書なり今按る小
此皇子ハ醍醐天皇第十六皇子兼明親王兼明親王なり御母ハ
藤原朝臣淑姬淑姬參議管根管根の女親王女親王二品中務卿中務卿ふて
前中書手前中書手と號號ししまま小嘗て小野宮右大臣實賴朝臣
が為小忌小忌まて嵯峨嵯峨の龜山小隱龜山小隱詩詩文音樂音樂小長小長又
書書能能一一世小老君子老君子の曲曲城傳城傳此親王親王の作り作りなり
又又あり初親王初親王龜山小居龜山小居也此北山小あり愛愛の施無畏

寺始名ハ觀音寺也 淑姫葬瘞の地なる故ハ親王ハ
當寺の檀越多ク志バクニシテ經歷ノ多ク所謂鬱
檀ハ親王自ら稱シテ左拾遺ハ官名本朝の侍從
ハ當まりこれ親王同時風騷の士ナリ故ハ左
拾遺ガ詩紙書シテ傳ハルベシ但一跋語ハ此皇子
手跡臨之也ト云バ何人ハ皇子の御書紙臨摹セ
そのと見ハル

崎陽客江戸の花扇ハ詩紙寄事

瀧澤瑣吉子ガ記ハ二十年前 寛政二 北里五明楼ハ花扇
トハハ遊女老母ハ孝行アリトシテ其事紙板トシテ卷ハ

賣ルものあり予ハ弱冠ナリハそのもの一
聞ハより耳の底ハと覺ズリハ友人南野ハ嘆賞乃
あまり彼孝女傳ト題セル小紙二頁紙花トシテ志ハルハ
この比の商船費晴湖崎陽ハ何リこの孝娼の事紙傳聞
テ感稱シ漫ハ是紙賛ハ多ク詩草紙ある人花弁
ハ南野ハ又是紙トシテ表装ハ彼花扇ガ艶簡
小帖の末ハその一ツ烟花三絶ト題シテ今ハ秘花
トシテ中畧又云彼遊女ハ心ハ風流ハ書紙
トシテ世人ハよく志ハル其孝行ハいハハ
知らざるものあり予ハその風流ハ能書紙取らん

名
 子
 子
 子
 子

子
 子
 子
 子

雲煙室藏

孝の一字小愛るのこ中畧媚^み成^{なり}歎^{なげ}く欲^ほ成^{なり}鬻^ひくその孝を
多く賞^うせしむ其名異^い國^{こく}小^こさ^さ之^の聞^{きこ}へ多^{おほ}く久^{ひさ}しこ未^い曾^そ有^あるの
美談^{みだん}ありしや云^い下畧^{げり}費^ひ氏^しが詩^{うた}左^{ひだり}小^こ記^きを

綽^せ約^{やく}氷^こ姿^さ似^に紫^{むら}雲^{うみ}清^{せい}歌^か妙^{めう}舞^ぶ更^{さら}能^{あた}文^{ぶん}脩^{しゆ}行^{ぎやう}孝^{こう}道^{だう}無^な
雙^{すわう}侶^{りょ}聲^{せい}譽^よ京^{きやう}華^か得^え上^{じやう}聞^{きこ}

名^な擅^{せん}青^{せい}樓^{ろう}第^{だい}一^{いつ}人^{にん}天^{てん}生^{せい}百^{ひやく}藝^ぎ妙^{めう}通^{つう}神^{しん}憐^{れん}余^よ長^{ちやう}作^{さく}天^{てん}
涯^{えい}客^{かく}碧^{へき}海^{かい}蒼^{そう}茫^{ぼう}欲^ほ問^{もん}津^{しん}

江戸有名妓花扇者。美有姿容。涉獵文藝。家有
老親。更能曲盡孝道。余來崎陽十餘年矣。嬌態
靜美。風流跌宕之輩。雖不乏人。獨難其孝而能

文也。余聞之。不勝神往。因賦二絕郵寄云。

茗溪 費晴湖 □ □

按^{あた}る小^こ此^こ花^{はな}扇^{せん}八^{はち}東^{とう}江^{かう}源^{げん}鱗^{りん}の弟^{てい}子^し小^こしと詩^し歌^かを^を書^か
多^{おほ}く紙^し志^しバツ^つく見^みるこ^こと何^{なに}りこ^こ又^{また}清^{せい}人^{にん}姚^{やう}中^{ちゆう}が詩^し成^{なり}
得^えるま^ま左^{ひだり}小^こ記^きを^を又^{また}花^{はな}扇^{せん}が真^ま跡^{せき}成^{なり}影^{えい}寫^{しや}して載^のる
其^{その}孝^{こう}子^し并^{なら}小^こ能^{あた}書^かる紙^し取^とるま^まり彼^かが容^{よう}色^{しき}の如^{ごと}きハ
年^{ねん}成^{なり}去^きるこ^こと五^ご十^{じゆ}餘^{じゆ}歳^{さい}予^よが未^い生^{せい}以^い前^{ぜん}の事^{こと}をま^まバそ^の
く^くし^し紙^し知^ちる事^{こと}何^{なに}ら^らん

伊^い人^{にん}道^{だう}阻^そ長^{ちやう}邦^{ほう}媛^{ゑん}溯^そ清^{せい}揚^{やう}國^{こく}色^{しき}弥^や間^{かん}雅^や神^{しん}娥^あ羨^{せん}淡^{たん}
粧^{せい}花^{はな}羞^{しゆう}王^{わう}氏^し美^み扇^{せん}詠^{えい}婕^{せつ}妲^た好^{こう}章^{ちやう}莫^な謂^い東^{とう}都^と遠^{えん}崎^{せき}陽^{やう}下^げ

原書誤以
都為湖

葦航。

戊申冬白。長崎客館題。寄江湖花扇美人。五律

一章

古寞 姚中一□□

あしぎ合歌仙三十二番

勝左

遊女花扇

忍(よ)と(か)ふ(ふ)て見(み)春(はる)の(ゆ)さ(ぬ)秋(あき)の(よ)の(づ)月(つき)

右

三島景雄

河(か)の(ふ)か(る)月(つき)の(かげ)を(と)綱(つな)を(ひ)き(る)舟(ふね)を(ま)り

又(また)石山寺(いしやまじ)鳴琴(なぐさ)の(に)字(じ)を(か)き(て)納(な)め(る)此(こ)額(がく)は(源氏(げんじ)の)間(ま)の(う)上(う)の(こ)る(ふ)掛(か)か(る)と(ぞ)ん(あ)る(人(ひと)の)所(ところ)為(な)と(覚(おぼ)え(る))

僧月儼が畫事

伊勢寂照寺僧月儼が画識者其格の陋を議するとい共
元来北宗法より出て唐宋以来南宗小比してハ格卑しと
文士の云々あり尤同時應举吳春風致ありとい共此輩
ハ意中不趣哉得ざるハ筆を下さざるが故小畫くや悠然
餘地ありて風致は兼備せり月仙ハ紙絹は見えハ瀟瀟と
して揮毫疾速あり又傍ら題辭ふえ及び頗る鑒賞家の
眼小くありて小於て文人輩南宗の大雅蕪邨は以て相配
比し格卑しとい論は發せ是ハ天然の品格ありて大雅
蕪邨ハ神逸の場あり是ハ一犬の嚙萬犬傳ふのをひる

大雅蕪邨の場あり是ハ一犬の嚙萬犬傳ふのをひる

月仙誠彼南宗輩ふくくべて陋むる小至るべし何ぞ餘の畫家といひくく目よと久や廣澤先生の書誠雪山小比するが如し去るは廣澤の書月仙が畫誠等閑小評をなすべし此格又凡筆の及ぶまふハあつざるなり

按る小月仙年千金の潤筆誠得ると之共晚年山門誠建之佛殿誠修造一經疏誠集め其餘誠以て貧民誠救ふと云中年世人貪僧と心得てその画誠陋る一もの又畫の世間小多き故ある人月仙が人物誠貧民乞人の形容小似多りと是形ち誠評する愛誣毀小て鑿識小ハ何とせ月仙が人物の簡なるハ仙釋の意なり

默契して鄙俚の俗習小染るざる愛其畫誠見て其人誠知るあつてまよ画きあや

近世江戸書畫會原始并落款

杏花園主人近世書畫會小宴集する愛の畫誠卷とて表名二水七画と題し序小其人名誠記し跋小所名時日誠記を如左

画人七名

雲烟室藏

- 芙蓉 梅溪 幹 穉
- 文鼎 南湖 紫山

近世所謂畫會者從此始也

文正 庚午 吾友

遠播 敬人

梅 鈴木氏

竹 鋪木氏

美善堂

梅溪寫

山水 文晁妻

竹 谷氏女志夫子 祭堂妻

幹

舜

山水 谷氏

壬子正月祭年於

席上文晁

拂子 春木氏

蓮 宋氏紫厚子

南湖

子心

右柳橋萬屋宴集。畫人席上所題。集以為卷。時寬政四年壬子。春正月十七日也。

杏花園 □□

盤珪禪師の逸事

師名永琢播州網干の人十二歳の時儒家の大學明德
章賦講むるに聞心小疑ふを何りてこそ是より深く直指
の宗賦者より難髪して雲甫愚堂了菴道元等の数師
小参して遂小悟入を正不生故よめる

き一向心を清き水鏡色づりさきまも垢つきのき
とよくうろの垢を離きありと云ふ又誹句小

草よ木よ汝小志免まらさ乃露

是又悟道發明の一詠あり栢原捨女ハ誹諧小名あり
夫の死後此師乃法門小入貞閑尼と云より禪師一とを

和州吉野小あり時里民の為小曰挽歌世一首賦作り
て何とへ一人の知るをなかりま結制の時僧徒数百人
来集一居多り一其中小賊僧ありて誰ハ銀子小失
ひ何其を衣服小盗ま一を毎日紛失物ありて難儀
小及び一が後小賊故をせる僧大既小知まらまハ衆僧一
統小禪師小訟て賊僧故追放せんこと故歎ひたる小禪師
聞届てそのま捨置ま一六数日の後衆僧又此等故
禪師小訴う小猶を其まをそ捨置ま一如此事三四
度小及びて猶そのまありらまハ衆僧大小腹故立若
賊僧故追小事ありまハ衆僧一人を殘らま退散ま

一といひ一師笑ひて退散一多ハ勝手多ぶ一悟道
善行の僧ハ教ふる及ぶ此結制左様なる悪心の者
城教一とさん為あまバあどり悪僧城より追放まき
といま一もそ衆僧大感服一ぬ彼賊僧も是城
傳一聞て大開悟一座中出でて賊城をせ一事共城
えつゝ懺悔一て前非城改免德行堅固の僧とありて
後世ハ名城つゝ一とぞ

小澤蘆菴翁の傳

蘆菴翁通称ハ帶刀尾州の産なり和歌ハ始免冷泉為村
卿乃門人なり一が故ありて破門さま一ハ蘆菴一時小歌體

并小書風とそ小變て一家城をせ一故卿も蘆菴ハ中
我調城守り居き者ハ何れもとハ感あり一とぞ何某の宮
久一々芦菴が和歌小長ドぬること城き一及ぶま毎
度御使一て召まはま共固く辞一て衆も隠者のこと殊
小老人あまバ風雅のことハ此方一呼むことハ礼城失小似
あまバ来らざるの道理ありことあり一を尋ぬ一ままとて
太秦の草菴一日記と訪を多まひ一ハ芦菴も何りあて
始て沙目見一中上其翌日宮一沙禮小出てそまより折ハ
宮一系上せりとぞ世上の俗人肩城後一ハ富豪の家小属
一あつゝハ侍一るとハ雲泥一とて近世ハ城一き人品あり又

宮ふえさむろの尊貴は風雅の多し小屈しつゝまひて三里
小近き愛城尋訪ハせし事古人のゆゑなりといふ
き沙心なきなりなり

又丙午のしり芦菴よき箏試求免つてつらう弾試ふ
姿ふえ似む其音さやうあふむそのまゝ樂人某小見せりし
小樂人を弾見ふ誠小響なり是ハ古き器を去るを木
理も見ごとく後世得ざるき箏を去りてかく鳴らてハ何ハせん
とそ戻しぬ芦菴あつていつらふいふ小をよき箏なりとて
手城入まをハ鳴りあへ其時を悔まひぞとて家負き
中より金五兩出して買求て箏の上下の裡の穴より砥

石をて甲の裏城磨り十日の間ひまなくもつて緒城うけて
弾試ふ小果して絶妙の音城發し勝まさる名器となりぬ
皆人感し羨しつゝ小或日中島道成来りつゝこの箏城
出して弾し道成を去てあを羨しき箏城所持しつゝ
そののまといし芦菴少しをゆく心小のるを去るまを
問ふ道成何の事か(きやといし)實ふまゝ此箏城君小奏
まを失禮ハゆりまを程の上手小良箏一面をたく
足さるハ恨なきハ贈り申なりといふ道成を思ひつゝ再三
辞きつゝをその志の厚うりつゝ悦びてまをいひけ其月
つらう携りて帰るまありとて

又ある時門人の富家なる者各齋なりし示せしとて
 人の妻の富の草葉ふをく露の風紙まのるの光りありたり
 まる一日の夕方行てくるさ小途中より輿紙やひて家小
 りの轎夫小賃紙与んとする小錢の三文あるさまは隣舎
 小乞ひし折節その家ももあつたれば三文のつくのひとそ
 よめてとらるる

津の玉のちふの河のつを波とつたをかまふるるを
 又ある夜盗人來りしつひるる翁と知りて大とや出ま
 を盗人共え入ぞりぬその翌夜まきりなまど回
 さふちりなまは後來まをちりぬるま

ありそ海の山石ふこころの福とよむる沖津白
 まる四條戲場小韓信の故事紙引く伎藝のまよて薑菴
 うるとて

末つひ小海とあるべき谷水も志す木の葉のわらるあり
 とよあるるをこまきありとりとそ然る小の歌ぬハ芦菴を
 む隠士学丹とつるがうとあり此韓信小題きる歌紙誰音菴
 小かきりし四句め志るまを少しそま紙聞ひつて世
 小薑菴ありといひつるまをそハ戲場も志るとま
 ちん芦菴の歌小名高りしことこまして志るまハ天明帳
 田祿の後太秦の地藏堂小假居せりその時 禁裡突よ

今朝のまは焼の系となりふりたりや昔の玉き乃庭
頼山陽杜詩以夔州為上乘の條に蘆菴翁和歌為當
代第一而其避災寓太秦時稱最深妙故太秦者蘆
菴之夔州也と芦菴公老杜に比してことさもあまき

ゆくまじりもの秋草をどう急てう城住所とさむきハ
いよいよ秋のまき人ふありまを秋の雪のよそふこそきん

初花のころ近きわりハ見ふ初しやといふ

時をぬ寒きふ光いりりちのき花ふもひのし根

うら

かりふきて過るやまきんうらう野の昔のいも垣根を

朝雪

山陰の祿を紙出る朝雪のつまきんを木このまき雪
近世京師を地下和歌四天王と称するハ澄月蘆菴慈延
蒿溪を各和歌の風躰公異し一様をさむ澄月ハ老
輩めて先達を芦菴ハ才氣秀發古躰今躰自由りて
詠歌の上手此人の上ふつる者なり大愚ハ清新况味公詠
て歌学ハ漢学公兼備する実ハ此道の宗匠なり蒿溪ハ
澹泊公專一して言外の餘情公志を高上の風躰なり又
和歌よくして近世の達人なりとぞ

橘春暉説

僧涌蓮の逸事

崎人傳ふ涌蓮の傳は載さるるといふも、小奇事はきき
 その大槩は載せしむる時茶人某の招き来る小涌蓮を愚
 僧ふハ茶ハこのまじとてさうふ行ざり、小再應ふ及び、
 遂ふまじ、さうて招ふ應、行まじ、小田ふ入りて志、
 坐し居り、小主人ぬと用事出来てまじ、跡めて涌蓮
 爐邊ふあふのころえあ、茶入はと見て居まじ、
 小あや、とりと取り落し、器ぬと共ふ少、焼爛
 小主人来りて大小真、高價をて得まじ、珍器乃
 かく損、をいむ、氣色面色ふあ、はまじ、法師氣の
 毒もや思ひ、黙然とて居らまじ、主人元其座乃不

興なるは愧、うらん色は直、内あやま、是非を、何
 卒和歌一首よ、添らまじ、海はまじ、とひまじ、ふとひ
 まは漸、ころあ、つきて志、まじ、をまじ、まじ、と葉
 とりて
 伊勢の海の浜まの翁の志、まじ、まじ、涌ふ、まじ、まじ
 と書て志、まじ、まじ、主人元、大小、よろ、び是、まじ、まじ、茶入
 の一奇事、まじ、まじ、まじ、まじ、まじ、まじ、其日、まじ、まじ、
 ぬとまじ、まじ、此器、まじ、まじ、まじ、まじ、まじ、まじ、
 某侯の法流、まじ、まじ、まじ、まじ、まじ、まじ、時、歌、まじ、
 人、まじ、小墨、乃、衣、まじ、まじ、まじ、まじ、合、祿、まじ、ぬ、まじ、まじ、

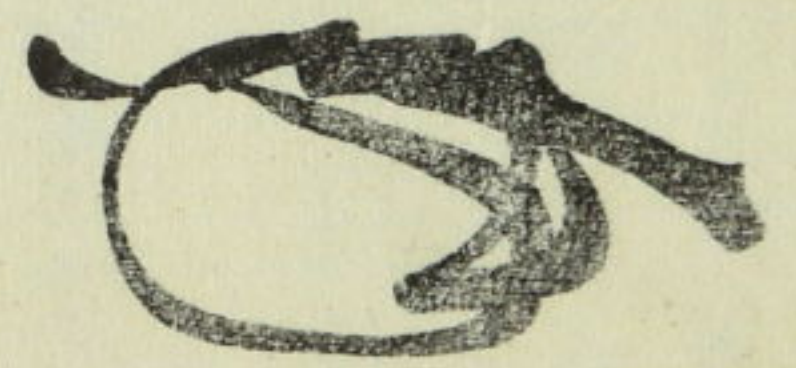
毎
以
書
魚
初
三
編
卷
之
三

三
五

是八涌蓮韻骸の贅真跡あり
此歌既小崎人傳小載也

雲煙室藏

命
を
あ
ら
ま
い



心
は
お
も

水
さ
し

さ
し
は
ま
な
は

し
ま
ま

し
た

名
家
書
魚
笑
六
編
卷
之
三
六

荷景縮寫

人るみよまのふい



さうらうちのふい

なごりふい

かな



中村家藏

まよと竹衣ふあゝと一時のうゝとそ

人あゝふ黒の衣いさゝりりまゝたあゝとそ

又山居春曙とつと題ふて

うねあふはうろとそと住山ふいあふとそ春のあゝの

勝間龍水の傳

龍水名ハ定安新泉と号を業城池永道雲ふ受てまゝ

篆刻城餘事とま江戸新和泉町ふ居住して父六町役城

勤む其後城繼て傍ら幼童筆道指南城業といまゝ常ふ

畫事誹諧をえあせり海の幸山の幸と云画本あゝまゝ

古章印譜二冊あり寛延寶曆の間府内ふ其名高一

又そのころ高名ある俳優市川徳齋三升を初として兩
三輩此門子あり常小財むさがる心ありて極て貧
窮ありども門弟餘分の束脩あまはば必ま返返まふ至る
まて困窮ある者の子小筆墨をとりて買ひむること
まくり又その支配するや大長屋より裏屋百軒餘
ありとのとを其役徳松負ふことさふあり又手跡稽古
の子供数多ありま二階下共小紙屑むびむき紙屑屋
みりて汝困窮の渡世何ぞ屑を遣まふ代物ふ及むん
やとて是又さふ受む萬事この如くありまば衣類とて
を自由を得む金錢あること稀あり或時四月初旬の比

老母女房をらるとも佛系一なる由守ありしが初松魚を
賣り来る聲越きくや否や持てる筆をを捨てそむらふ
よび入まそ買得しが家内小代錢半ありて八たのりたまは
せんまをく婦人等の信仰あり一向宗の持佛堂ふ三三
具のきよらふ小餅りある紙取つぎまぐ小隣町ある仕廻
物屋の通りくろりあるを呼て賣拂その錢をて輕の價
越つくのひ近邊の朋友平砂百菴乾什買明をて紙招き
て大酒宴紙をて数盃多ぐり一室之家内の者ゆりて
大ひ小敬馬き三三道具の何とぎも紙うらりく龍水云や
そまが初松魚小變ドとるこそ南無不可思議光その方

どろ今日佛系してありとと思ふ夏即極樂日まも
朋友と共小會してよろこびふのむ夏即如来ありとて
少えころふらげむ談笑自若りとぞ又寶曆六年杉森
稻荷の幟を新小製一書紙とてまきなる小龍水氣分す
ぐまざることをのりて間小合さるる詮方なく其子息小属一
て書せたり書ありて父小問て名字紙何と書中魚まを
ひひるまは龍水谷て堺町能優等おや方の名紙請つぎて
名乗るが時花物あり又釣鐘の子をま鐘とこの子を風
鈴と云汝ハ龍水が子なるま蛇水とありとて書る一とて
そまより杉森の幟ハ蛇水が筆ありとて諸人大ひ称美

まとそのころの物ごころあり

寶曆の昔と今日とハ僅小八十年バウ紙魚ごの龍水が性
質謙遜ありて和漢の文人を評せん俳優の言語釣鐘
の類小比況しとて又幟を書き程の腕紙まて未ご
別号紙立ざるをむと古人の淳厚うくの如し

梅里山人の逸事

山人姓陶名酉字冲己号中郷橋邊人江戸本所中之郷
小住を海尾師某あり温潤ありて世事小かこりて壯年の
ころより家事紙子息小任せて其家のころころ小閑居し
常小畫事紙とて山水洒落花卉翎毛各逸趣あり

又山水中小自ら題辭せるものあり時々墨水の邊小出で
釣紙垂て月夜家小歸ること紙にまき詩賦を吟じて
自ら閑適紙甘んト又平生他行をもごと小家紙鎖をこと
ありある時盜人入りて鍋金のさびを持行る紙さやふ
住婦人是を見つらたるあり婦人山人を悔り来りまきばく小
其由紙告て何を見多ま盜人何まことひいふ山人是を
見おろし自若としてよしとてそのまをまてあろう其後
猶鎖をことあり又常小画紙寫して人小何ふといふも
決して潤筆を求ること紙のまは自ら隱居の扶持紙
まて足まるといふある人畫紙をよことあり金二百足紙包て

潤筆小あくる山人辭してひびき畫をりて後まことまむと
之共いあくるゆるきん故小止事紙得むひそふ机上り
置て物るその後三月月程歴てまこと訪ふことある小其ま
机上小ありしとぞその澹泊なるまより画を又あつる
超元ありし

白石先生の書再収奇遇の事

予が本舗の主人玉巖寛政享和の以を不新寺町慶元書
堂小ありて少壯あり一時四谷邊小事ありて通行せし折
うらある紙屑屋小紙屑のふら多く積りありし故紙
の袖小さらるるものあり何心を引出しひき見ま小箋小

白石先生の楷書自作南天燭芭蕉自鳴鐘の詩三首紙寫
せしものありき共真贋のことハ知るべきやうなものを公至て
低價紙出してこそ紙予ふくまうまよといひまうし小屑屑
元よりあつざることをまよバ一紙の反古ところ得さう小贅眼
小及びんを物せし紙志あて置いて去まうやぞて家小物りて
後北山篁墩あどの先生小示せし小是ぞ真跡と小奇絶の
書法ありと各讚賞せし玉巖こふして大ひ小ふらうび
天の賜ありとて珍荷も紙朋友小玩月と号して書生を
書肆ある者あり是又慶元堂小同居し直紙以て懇小渴
望せしとを玉巖ゆるさば元より沽ざるものとする由（小他

行のあり紙窺ひ箱の中より其書紙さぐりて價金四兩を
入き並らう其後玉巖此書紙出し見んとせし小白石紙金小
ある者ハ玩月とて封金ある紙見て大ひ小驚き玩月乃
物も紙待早速元のごとく書小之んことを紙ひくどもの少も
肯ひまもや已小他（沽却せしをまよバ物さきやうありとを只
黙して言葉あるまよバ是非あるそのまよおまをうしぬ玉巖主
人を此白石翁の詩紙得しより古書紙好むの端とハまよま
より老年小あまひて折こかこらまきたりき其後追々好事
の心深まあよひて猶白石の書の志念やまよ朋友と書画乃
話小及（必しひ出せし程のりあり其後三十年紙歴玉巖

晩年ふ及び一ころ予と白石先生の書紙得しとあるふ
 小措ありて詩の様常ふ耳ふ孰せし雪のふの髪髯し
 贖ふ何ざるまにニツ有べきやうあり果して此書をんとあひ
 即時ふ玉巖の居るが紙伺ひ机上ふ載置て物りぬ玉巖
 帰り来りてこま紙見しふ常々思念ふ堪ざる雪の白石翁の
 書字ののまをてありし愕然とて驚き夢幻のこも
 してやまはありふ是ハ雲煙がかくまのつるなるべし即時
 使して呼まし一ふ予即ちゆきて手ふ入一由紙述一ふ是ぞ
 ここの常々そのぐる雪のそのなる今再び見ることふとたひふ
 喜び價あふ程そそと云はまし一ふ予いづく

直紙取るべきや実ふそまあるハ優曇花の再會と云そのま
 よろこふ不堪うりこまハのまふまぬせんそ贈りし此書
 ことゝ為ふ千金をわたくしとよろこびまそまよりま玉巖堂
 の紙花とハなまより千歳の紙墨の今ふ折と出る紙見るハ奇と
 まるふあふまに人せ一代ふ一紙のそのまあて一ふ失ひ又
 数十年紙経て再びこま紙得るくる奇講のあはく首ぎや
 是韓退之が畫の記の感嘆と同日の談なるべし玉巖老人此
 奇講紙よろこぶのあまう它山先生ふ跋文紙をまが後あは
 して世紙去りぬ先生をその秋姫路侯ふ随逐せし都下
 ふあはまじり一故ふいまも稿紙結ふ及ばざる事ときこゆ

熊澤伯繼藤樹先生小謁狀請事 并真跡短冊

藤樹年譜小元和十八年辛巳先生三十四歲此冬熊澤伯繼
來て業茲受く去秋始て來て人茲々謁茲請ふ先生その志
の真偽茲志る故小固く是茲辞も小請てやまぬ先生書
茲以て是茲辞も小猶請て曰たぬ以教小與らぬといふ共い
て及拜謁する事茲許さるると其情甚愁て涙茲滴る小至る
先生其情狀茲聞知して是茲憐之謁する事茲許さる茲
業茲受る事茲許さる強て帰るも冬又來て固く請てま
此小放て終小業茲授く云々其餘傳記諸書小出茲之姑置
る小我友信州人市川信壽其墨跡の短冊茲花を珍故る小摸出

綱代

綱代木

日遠遍

耳以左与婦浪毛氷羅之

天仿由留宇治乃河風巾江原

まゝ先生の末孫中江久風の物語りふ熊澤氏始て藤樹先生ふまゝ入門の時了芥よめる

三人の系る社ふ神はな〜この内の内お神を備〜まゝと無城心といひ〜ふ後樹先生

ふお振神の社八月をまき〜ある〜このうちふ〜と有城まつて答〜ま〜となり藤樹と了芥と師弟まきと元後ふその学風の異あること〜見より歎然〜

仁齋先生櫻隱の號 附梨本翁

伊藤仁齋先生棠隱の別号ある八世人の知るやふありまゝ櫻隱と号まゝ〜とあり其故ハ古学和歌集ふ菴室の前

ふ櫻城植て侍り〜ふ年城経て花のさくらありまゝ

寺の中城〜とありふあ〜のつら〜橘の本のかまき家の〜

此以戸田茂睡此人の傳卷四小詳あり住菴城世の人のわれ家といふ城

人〜まぬ身ふま〜ひま〜のつら〜をむ〜をなき隠家の〜

又菴の前ふ山梨の木阿まゝ

の〜ま〜福世ふぬり果〜老の身ハ隱き住き山梨の〜

是より後睡ふ梨本乃号あり是住所ハ江戸ありて同特の人あり歌と其意を〜箇合せることあり〜仁齋先生の真跡和歌を摸寫〜て〜ふ載せり

池水多佳趣

松立不此其心定以

其心一乃其子かく

其心陸守以亦子

維楨

信州佐藤昌也藏

大石良雄二武畫讚并子息童名

附清人四十七士の義烈称誉事

大石氏の画小巧あるハ世の知るところ更ふ云ふ及び近き以
宅山先生のその公小姫路小陪随せしき一次に赤穂小遊
ハまき佐古志浦の奥藤氏小邀一らまき四五日其家小淹留せし
る良雄氏の遺墨紙ハ多く貯一花巻一うち小二武画讚と云

その所の二枚をりの屏風の如き帖あり右の箇八源廷尉義
経きよ其の着色しきして画えき鎧仕立と云甲冑よろいして床とこ几こ倚より
左手ひだり小弓こゆみ紙し持もち右みぎ小軍扇こぐんあふぎ紙し持もち黒地くろぢ小日輪こひろ紙し朱しよして
出でき一ひとあり其その讚うた小曰こいふ

源義経者頼朝秀弟也。季秀恐戰則勝之。攻則取之。
本朝古采誤無出其右者。可謂暗合孫吳壓倒韓
白也。其事跡載在口碑。

左ひだり武田入道信玄のりなり是こゝに軍装ぐんさうあり共とも甲冑よろいハ粗惡ろあくこ
左手ひだり小料紙せりょうし紙し持もち右みぎ小筆こふで紙し搦とる像ざうあり讚うた小曰こいふ

武田信玄者初名晴信。新羅三郎之後也。勇而用

兵破義清長時。而領其邑。與氏康信長相戰。而爭
其地。世多稱其謀畧。長尾輝帛其敵手也。

其手札ハ楷法瘦樸かひあり共とも画法えがひの功力こうりきありふハ及およびひぐく
とぞ此こゝに其その名な氏うぢハらの地の舊族きうぞくありて世よ々々大おほ在あ家や販盜とるハ餘あま業わざあり

今いまの主人しゆじん名な卓たく字あざな君きみ超こ好このく竹たけ紙し画えき狩亭ていと
稱なづは浪なみ善ぜん小竹こたけ翁おきな親おやく詩うたをよみ風かぜ流なが蘊うん藉せきの心こゝろ なる故ゆゑ小こ淺野家退轉せんのかみ以前いぜん
藩士はんしより往復おうふくの書牘しよかくのうち彼か義士ぎしの書簡しよかん紙し集あつめ一ひと軸たくとま

浪華竹山翁なみざさの跋文はくぶんあり其文中そのぶん小云こゝ淺野家士復せんのかみ雙言すゐごんのり
跡あと紙し琉球人りゅうきゅうじんの清朝せうてう小到こり一ひとその事こと紙し談だんぶる紙し清人せいじん耳みみ

紙傾かみかへ多おほて是こゝ紙しき其その義烈ぎれつ紙し感かん一ひと座ざ泣なみりらざるそのありと
大島筆記と云書小見おほしま之のありとあり
海外奇談と題だいする三卷あり赤穂
義士の事紙忠臣庫しんしんと小説文記せ

富森助右衛門八書を佐玄龍小学びて其風成能き三社宅宜或神号成
見ることあり又阿州佐藤氏小青土佐屏風成書と一紙所藏せり

雲煙縮寫

越満太四狂元天福

富森華龍敬書

富森華龍敬書

大石良雄畫



小道徳寫

皇祐

雲煙室藏

一城清人の改竄せしむと云ふも恐らくハ
妄作ありし一程春臺の産語の類なりん

良雄の長男城主税と稱するハ誰ぞ知る是ハ退轉の後元服
城加一之を改名一各あり初ハ松之丞と云赤穂没落乃
後父と共に京師山科の西山小僑居の日其所より菊屋赤穂乃
城地の名
ある前川某小贈る書の封皮貞後氏小遺り存す大石主税
と傍小松之丞事と注右ハ先生の摘註小記赤穂乃
紀行の城抄出さ

赤穂義士閑居替名 并大高去より發句

赤穂義士各閑居の時城州伏見蛭子町の青楼小光陰送る
其間戲文笹屋清右衛門いよの所持一紙此五祇園町之披
露ろ一々るより

大石良雄 うき 大高原吾 まご 小野寺幸右衛門 ちん

小野寺十内 とけ 中村勘助 ちゅう 冨森助右衛門 たけ

村松三大夫 えま 潮田又之丞 あつ 勝田新左衛門 せう

右何まを假名状申て文ハ女子の如く又良雄天井板小書捨し
城彼笹屋板を取りくづして屏風の如く小仕立あり其詞小云
今日亦逢遊君空過光陰明日如何可憐恐君急
拂袖歸後世人久不許逗留不過二夜者也
又大高原吾時の遊女の名城頭小書て屏風小書

夕霧や人まゝ窓の薄阿の利 ちん
芳野いふ小白い小袖ハ山さくらら

高橋や多しと云乃夕をみ
風くほる雨の袂や阿の川と
初音と如一番たての郭公

近世名家書画談二編卷之三畢

